大人玩具検品部門―サンプル―

少し早い梅雨の訪れ。今朝まではしとしとと穏やかだった雨は、昼を過ぎた頃からうるさいほどの土砂降りになっていた。

しかし、こんな雨でも客は来る。

この部屋の広さは十畳程。それほど広さを必要としないのは、ここが完全個室タイプのアダルトグッズショップだからである。他の客と顔を合わせることなく、恋人とねっとりじっくり玩具を選ぶことのできる店。だから商品はせいぜい各種三つ程度置いておけば間に合うのだ。しかしその代わり、売れたものはすぐに補充しなくてはならない。

安藤(あんどう)達臣(たつおみ)は先程売れた貞操帯とディルドを補充しながら雨の音を聴いた。

「いらっしゃいませ」

時刻は十五時。来店したのは二週に一度やってくる男性二人組だった。

前を歩く背の高い方は短髪浅黒筋肉質。対してもう一人は小柄で髪も少し長めの可愛い系だ。でも気になるのは、後者の身体が異様に細く、顔色が青白くげっそりしているところだった。二人が対照的だからこそ余計にそう見えるのか、と最初こそ思っていたけれど、こうして観察するような目で見てしまえばその異様さは明らかだった。

そして何より、彼はいつも怯えているように見えた。

短髪は慣れた足取りで店の奥に入った。入り口正面に並んでいるのはＳＭグッズ。ソフトなものから、一目見ただけではどうやって使うのかも分からないようなハードなものまで揃っている。

その中から手に取られたのは手錠だった。しかしそれは前回も買っていったよな、と思い出す。丈夫さが売りのあの手錠をもしかして壊したのか、と不安になるけれど、当然客のプライベートに踏み込むわけにはいかない。

でも、どうしても気になってしまった。

「お客様」

「ん？」

短髪が手錠を片手に振り返った。ずっしりと重いはずのそれを、まるで紙のように持っている。

「前回も同じものをお求めでございましたが、もし耐久性に問題がございましたら――」

そこまで言えば、皆まで言わずとも伝わるだろう。そして短髪はしっかりと頷いた。

「ああ、いや、俺の力が強くてね。ここで買ったもので不良品なんて一度もなかったよ」

爽やかな笑顔。突然話し掛けたにもかかわらず気分を害した様子もない。一見すると器の大きそうなスポーツマン。しかし、本当のところはどうなのだろうか。

「左様でございますか。ありがとうございます」

これ以上は何も言えなかった。しかし、耐久性に優れた本格的な手錠を壊すとは一体どれほどの力で扱っているのか――彼を。

「突然失礼いたしました。ごゆるりとお買い物をお楽しみくださいませ」

ちら、と小柄な方にも視線を投げてみる。しかし彼は俯いたままで目を合わせることはできなかった。

「ああ、ありがとう」

カゴを持っているのは小柄な方。まるでボスに付き添う舎弟のようだ。けれど二人の関係が身体の関係にあることは明白だった。

小柄な彼は、すでに三十度を超す日もあるというのに長袖を着ていた。短髪がピタリとした半袖を着ているところを見ても異様だ。明らかに身体を隠している。まさか病弱ということはないだろう。病弱なら、短髪が手にしている手錠や下剤は使いにくいはずだ。

「これ」

「……はい……」

短髪が手にしていた極太ディルドをカゴに入れた。重さだけで五百グラムもあるそれは、立った状態でアナルに入れ、抜けないように耐えさせるという遊び方が売りのもの。投げるように入れられたことによって、カゴがガクンと下に揺れた。

「あとは……」

選ぶのは毎回短髪だ。小柄な方に好みを問うわけでもなく、是非を問うこともない。

（一方的だよな……）

もしそうであっても、もっと健康的ならいい。口を挟ませることも許さないような関係を構築しているカップルもたくさんいる。しかしそういうカップルは、やつれる程細くて顔色の悪い人間にカゴを持たせるようなことはしない。

「君、前にあったアナルビーズがほしいんだが」

突然こちらに向けられた声にハッとして意識を戻す。

「はい、どういった形状のものか覚えていらっしゃる範囲でご教示ください」

置かれている商品は全て自社製品だ。ここは販売部門で、玩具開発部門が他にある。そこで作られたものだけを置いているのでだいたいの販売時期や形状を聞けば調べることは可能だった。

「ええと……あれはどのくらいの大きさだった？」

初めて短髪が小柄に話題を振った。それを見て、一瞬で悟る。

（プレイだ――……）

恐らくかなり大きなサイズのアナルビーズなのだろう。それを咥える本人の口に――こんなに大きなものも入るアナルなんです――言わせるつもりなのだ。

「おい」

「あ……」

小柄はぼうっとしていたのか、それとも体調が悪いのか。

「……えっと……八センチ……です……一番大きいところが……」

「それで？」
それだけ聞けばだいたい検討はつく。それに、そのサイズのアナルビーズは店頭に置かれている。ちょうど、短髪のすぐ後ろに。
「……あ……あの……」
大丈夫なのだろうか。本当にこの二人の関係は恋人関係なのか。恋人とまではいかずとも、合意の上でプレイをしている関係なのか。
「ほら、ちゃんと言って」
「あ……ごめんなさい……あの、大きさが徐々に変わっていって、それで……」
中には体内に玩具を咥えたまま、人によっては電動玩具のスイッチを入れたままの状態で来店する人もいる。そんな人は嬌声と絶頂を必死に堪えながらなので様子がおかしくなるものだけれど、この人の場合は絶対にそうではない。明らかに様子がおかしかった。なのに、必死に短髪の言うことを聞こうとしている。その健気さに胸が締め付けられたように苦しくなる。
「えっと、その……」
覚えていないわけではなさそうだ。ただ、体調不良によるものか思考が定まっていない感じ。
「――承知しました。それは恐らく去年発売されたものだと思うのですが、その後継版がお客様のすぐ後ろにございます」
数歩進み短髪に近付く。そして短髪が振り返るのに合せて商品を取った。
「こちらです。カラーは黒、赤、ピンク……それから白がございます」
白をあえて最後にしたのはこの商品で納得させるためだった。アナルに使う玩具で白色というのはかなり珍しい。汚れが目立つからだ。しかしＳＭ好きには人気の色。理由は言わずもがな。
「ああ、白があるのか。前に買ったのは……何色だった？」
しかし短髪はまだ小柄を辱めたいようだった。
「あ……黒、です……」
「そうだ、黒だったな。手を使わずに抜くところがすごくよかった」
普通ならきっと顔を赤らめただろう。しかし小柄は身じろぎもしなかった。
「……ああ、これをいただくよ」
短髪はもう叱ろうとはしなかった。やりすぎたと思ったのか、帰宅後のお仕置きに気持ちをシフトさせたのか。
そしてまた、無造作に玩具がカゴの中に落ちた。ガクンとカゴが下に揺れる。
それから十五分、立っているだけでもつらそうな小柄を差し置いて短髪は玩具選びに集中した。そして満足気に会計を終え、荷物はまた当然のように小柄に持たせ先を歩く。
二人が出口に向かい、「ありがとうございました」という挨拶のタイミングを計っているときだった。
小柄がこちらを振り向いた。そして、声もなく唇が動く。

（ん？　……っ！）
その唇は「たすけて」と言っているように見えた。
思わず目を見開いた瞬間、細く小さな身体が床に崩れ落ちた。
「……お客様！」
駆け寄りそっと頭を抱える。
「お客様、」
酷く軽い身体。見た目以上に痩せているらしい。窪んだ頬。けれど伏せた睫の長さが印象的だった。
「医務室にお運びします」
「あ……」
短髪は一度も小柄に触れなかった。自分がしてしまったことを悔いているのか、それとも突然のことでパニックになっているのか……ただ立ったまま見下ろすだけ。
「救急車もご希望でしたらお呼びしますが」
しかし、こんな店だ。そして男同士――いや、何よりこの身体を見られるのはまずいのだろう。まずいものが、身体中に残っているはずだ。
そして想像通り、救急車という言葉に男は首を振った。
「医務室でよろしいですか？」
「あ、ああ……頼むよ」
同意は得た、と思いながら成人男性とは思えない軽い身体を抱え上げて医務室に向かう。しかし短髪はついて来ようとはしなかった。
「お客様、」
「すまない、俺はこの後仕事が……」
どう考えても嘘だった。どうやらこの身体を見られたらまずい相手は救急隊員や病院の医師だけではないらしい。
（俺にも気まずくなるくらい、ということか……）
しかし今はやり合っている暇はなかった。とにかく一刻も早く柔らかいベッドで寝かせてやりたい。
「……では、目が覚めたら連絡を」
「ああ、そうしてくれ」
男の本名や連絡先は店に登録されている。その意識があるのか、短髪は足早に店を出て行った。
（くそが……）
店内にあるコールボタンを押し、店長に客の退店を告げる。そして医務室を使う旨も。
『すぐに運んでください。店には私が』
「ありがとうございます」
ずっと抱いていられると思う程軽い身体。医務室に着いてベッドに寝かせても、腕に疲れは感じなかった。

「あわ……すごいな……」
医師は一目見てそう言った。隣で看護師も言葉を失っている。
「栄養失調もありそうだね……持病は聞かないと何とも言えないけど……」
この建物には複数の部署が入っている。地下から地上の全ての階が特別な施設になっているのだ。中にはかなりハードなことを行う部署もあるので、医務室と言っても小さな病院と変わらない設備が整っている。医師はテキパキと診察の準備を進めた。
「苦しそうだったとか、倒れたときに頭を打ったということは？　胸を押さえていたとか」
医師の質問に答えながら小さな顔を見下ろす。顔色が悪いだけでなく、隈もひどい。寝かせてもらえていなかったのか、それとも眠れなかったのか。
「いえ。ただ……パートナーの見ていないところで助けて、と」
その言葉を聞いた瞬間、医師と看護師の手が止まった。
「……それは……ちょっと厄介だな。ここに来るのにトラブルは？」
「いえ、連れは逃げるように帰りました」
「ふむ……」
医師がベッドに横たわる彼の服を捲った。
そしてそこに現れた腹に全員が息を呑んだ。
「……安藤くん、だよね。ちょっと上に報告入れた方がいいかも。念のため弁護士の用意もするようにって」
弁護士、という言葉に自分の顔がこわばるのが分かった。そういう事態になりうる、ということなのだろうか。いや、その必要があるくらい、この青年が追い詰められている可能性があるということなのか。
「えっと、安藤くんの所属は……」
「販売部です」
「ああ、じゃあそこの電話の受話器上げて、内線押して三番」
「は、はい」
もう医師は患者から目を離さなかった。看護師も悲痛そうな顔で身体中の確認をしている。
手伝おうにも手伝えることは何もない。まずは指示されたことを、と思い受話器を手に取った。
『はい』
「お疲れ様です。安藤です」
『ああ、どう？』
先程店長に医務室に行く旨を連絡してあったからか、支配人はすぐに状況を察したようだった。
「先生が支配人に連絡して弁護士の用意をと」
『ああ、分かった。そのように準備しておく』
そのスムーズなやり取りに、支配人も医師と同じことを考えていたのだと分かる。
このようなことは今回初めて経験したけれど、もしかしたら時折起こりうることなのかも

しれない。ない方がいいこと。だけれど、今は心強かった。

〜〜〜〜

「さっき、私の職場から連絡が来まして」

放りっぱなしだった携帯を取り、改めて文章を読む。

【お疲れ様です。総務部の宗形です。販売部支配人から話は聞きました。

今回の件、弁護士が必要な場合にはいつでも連絡が取れるようにしてありますので遠慮なく連絡をください。

その際にはまずお名前と電話番号をお願いします。万が一急を要することが起きたときは、すぐに警察に駆け込んでください。その際、私の名前を出してかまいません】

差出人の名前は宗形総一郎。会ったことはないが、気遣いのできる優しい人だというのが文章に表われていた。

内容に特に問題ないことを確認して画面をそのまま彼に見せると、彼は顔を俯かせた。

「すみません、僕携帯も持ってなくて……」

恐らく連絡先のことだろう。

しかしそれは何となく想像がついていた。恐らく今は財布も持っていないだろう。きっとあの短髪は身体的なものだけでなく、経済的にも虐待をしていたのだ。

「……では、名前は」

「え？」

「お名前を教えていただけますか」

言いながら、そう言えば自分も名乗っていなかったな、と気付いた。名刺は渡していたけれど、会話で名乗ってはいいない。

「えっ、すみません、僕っ……し、失礼しました！」

そんなに気にすることはないのに、彼は可哀想になるほど申し訳なさそうな顔をし、落合(おちあい)楓(かえで)と名乗った。

「落合さん」

「楓でいいです。……女みたいですけど」

「そんなことありません」

華奢だし、外見も確かに中性的だ。だからこそとてもよく似合っている。

〜〜〜〜

「はい……あ、けど僕……こんな身体で達臣くん欲情できる？」

その質問だけで欲情できます、とは言えず、眩暈のしそうな頭をこっそりと押さえて息を吐く。

「こんな身体、じゃないでしょう」
身体はまだお腹しか見たことがない。しかしそのことを楓は知らないはずだし、恐らく楓がそう言うのは平均よりかなり細いからだろう。ここに来たときに比べれば多少肉がついたようには見えるけれど、それでもまだガリガリだった。
「でも……僕……」
ガバッと楓が身体を起こした。つられるようにして安藤も身体を起こす。ベッドから降りた楓は一気にばさりと上衣を脱いだ。
「楓さん……」
初めて見た楓の身体。お腹は医務室で見たことがあったけれど、全体を見るのは初めてだった。
「……こんな……身体で……」
隠したかっただろう。見られたくなかっただろう。でも楓は見せてくれた。縄の痕の残る身体を。
「……おいで」
きっと、ずっと縛られっぱなしだったのだろう。うまい具合に服からは出ないようにされていたけれど、白い肌に黒く擦れた痕がしっかりと残っていた。
（あのときは気付かなかったな……）
それはきっと、打撲創に目がいってしまっていたからだろう。もしあのとき気付いていればもっと優しくできたはずなのに。こんな風に身体を曝させるのではなく、もっと何か、穏やかな方法で。
「達臣くん……」
楓は自分から腕の中に戻って来ようとはしなかった。しかし、強引にしてもいいのか悩む。
「……楓さん」
そっと手を伸ばす。まだまだ細い手をこちらに差し出してほしい。少しでいい。ほんの少し、角度を変えるだけでもいいから。
「……楓さん」
「達臣くん……」
視線がこちらに向いた。目が合う。それだけで、もうよかった。
「わっ！」
腕を引き、強引に抱きしめる。
「……怖いですか」
「っ……だい、じょ……」
でも、震えていた。
「すみません」
でも放す気にはなれなくて、せめてと腕は動かさずに落ち着くのを待つ。
「……びっくりしただけだから……」
その声さえも震えているというのに、楓は優しかった。大丈夫、嬉しい、と繰り返す。

「……楓さん、」
自分でしておきながら、何と声を掛けたらいいか分からなくて。エアコンが効いているので裸のままでは寒いだろうとタオルケットを背中から巻くようにして掛ける。
「……横になりたい」
息に乱れはなかった。それでも落ち着かせたくて、言われた通り楓の身体をベッドに倒す。
「すみません」
あんなに大事にしようと思っていたのに、もう強引なことをしてしまった。
「ううん……達臣くんも横になって」
見上げてくる目が不安を訴えていた。急いで横になり、タオルケットごと小さな身体を抱きしめる。
「……好き、達臣くん、好き……好き……」
苦しさを感じるような声に、胸が締め付けられた。
「達臣くん……」
なのに、好きと繰り返すそのいじらしさにペニスに血が集まり始める。
「……楓さん……」
顔をずらすと、すぐに目が合った。欲情に濡れた目が安藤を見ている。
「怖くない……？」
「ん、怖くないっ！」
ただの刷り込みかもしれない。安藤への恋愛感情は気の迷いかもしれない。それでももう、止まれなかった。

〜〜〜〜

事務フロア――。
初めて足を踏み入れたそこは殺風景で、見るからにオフィスらしい作りになっていた。案内された応接室の真ん中に置かれた机と椅子。壁際には背丈サイズの観葉植物。その横にウォーターサーバー。普段は使われていないのかもしれないと思うほど綺麗な部屋で対面したのは、いかにも仕事ができそうな男性だった。
「改めまして、総務の宗形です」
「落合楓です。お世話になります。その節は本当にありがとうございました」
と言ってもまだ応募前の段階で、楓が仕事内容について訊きたいというので連れてきた。そしてそこで、なぜか人事ではなく総務の宗形が入室してきたのだ。
「いえ、お元気そうでよかったです。その後、困ったことはありませんか」
「大丈夫です。安藤さんがすごくよくしてくださって」
「そうですか」
宗形がこちらを見た。会ったのは初めてだけれど、メールのイメージ通りの印象だった。年は四十歳くらいだろうか。落ち着いていて、安心できる雰囲気の人。

「お仕事を探されているんですね」
勧められるがまま楓と一緒に席に着く。すると宗形も向かい合う席に座った。
「こちらをどうぞ。このビルの部署一覧表です」
わざわざ二部刷ってくれたらしい。安藤用にと渡してもらった書類に視線を落とす。
「今日は、安藤くんも異動した方がいいかと思って用意しました」
「え？　私もですか」
特にそんな予定はなかった。先輩や支配人にもそのような話はしていないのに。
「ええ。もちろんそのままでもかまわないのですが、落合さんが就職されるなら一緒に働ける方がいいかと思いまして」
「はぁ……」
一緒に働くと言っても、同じ部署になるというだけだろう。シフトが違えば、逆にすれ違うことが多くなりそうだ。
「まぁ、まずは落合さんができそうな仕事を見つけるところからですが、ちょっとハードな仕事でも、安藤さんが一緒なら頑張れるかもしれません」
宗形は安藤ではなく楓に向かって微笑んだ。楓のことを最優先にしてくれるということだろう。
（すごい人だな……）
あくまで客だった楓が逃げてきたときも、寮や弁護士を用意すると言ってくれていた人だ。それは当然この人の考えではなく会社の意向なのだろうけれど、そう思うとさらにすごい。福利厚生がどうっていうレベルではないような。
でも不信感は一切なかった。自分が勤めているからというだけでなくて、不思議とこの人なら裏切ったりしないと思えるのだ。この宗形という男が。
「落合さんも、仕事中ずっと安藤さんと一緒だったら気が楽なのではありませんか」
「はい。でも……」
そんな仕事があるのだろうか、と思っているのだろう。それにもしかしたら、自分のせいで仕事を変えさせてしまうとも。
「私も彼と一緒に働けるなら異動を希望します」
楓が思いを口にする前に宣言してしまえば、意味を理解したらしい宗形も口角を上げて頷いた。
「では、二人ペアで働ける部署の説明をします。まず、博物館。しかしこちらは手術を必要とするハードな部門なので、今回は説明を飛ばします」
しかし書類にはきちんと説明が書かれていた。陰部を弄り、展示品となってお客様に見てもらい、実際にも触れてもらうという仕事。写真こそなかったけれどペニスを切除したり、亀頭のみを残して竿を切除したりとかなりハードな内容だった。
「すごい……」
「ん？　興味がおありですか？」
「あっ、いえ……でもすごいなって……」

興味がありそうな様子だった。じっと下を見て、説明に読み入っている。
「博物館の展示物も確かにパートナーと出勤できますが、展示品として仕事をしている間、顔は壁の奥にあります。なので何も見えない状態で下半身だけを他人に弄られることになり、その間安藤くんの顔を見ることもできません」
「えっ……あ、じゃあそれは……」
楓が書類から目を離した。いやいやと言うように首を振る可愛い仕草はきっと無意識だろう。
「では次、快感研究所です。こちらは人間の身体の性感を研究する部署で、玩具開発のためのデータを取るところです」
話を聞きながら書類を読む。どうやら乳首や陰部という部分以外にも、新しい性感帯を見つけるために機械を付けて数値を計測したりもするらしい。
「しかしこちらは連日の勤務が必要になる場合が多いので、いきなり週五日勤務というのもプレッシャーでしょう。もしご希望でしたらあとで異動もできますので、家でゆっくり読んでみてください」
宗形が、自分用の書類を捲った。合せて手元のページも次に送る。
「続いて、こちらは玩具開発所です。先程の快感研究所から得たデータを元にアダルト玩具の開発を行う部署になっています。ここは実際に制作スタッフと話し合いながら一緒に新しい玩具作りを行うところで、次のページの検品部門がその玩具を実際に使って試すところです。検品という名前にはなっていますが、実際には玩具モニターと思っていただければ宜しいかと」
書類の中に、販売部についての紙はなかった。説明するまでもないだろうと思ったのか、それともそこで倒れたことに気を遣ってなのか。
「快感研究、制作、検品どれもパートナーである安藤くんと一緒に働くことができます。何か気になるところはありましたか」
「えっと……」
かなり特殊な仕事内容だった。でも楓が嫌悪感を示さなかったことに安堵しながら安藤自身も書類にもう一度目を落とす。
「……僕、検品が気になります。制作も少し興味はあるんですが、あまり意見は言えないと思うので」
「そうですか。では検品部に行ってみましょうか」

まさか突然行ってもいいのだろうか――そう思ったけれど、どうやら宗形は管理職といわれる立場の人と知り合いらしい。みんな嫌な顔一つせず、むしろ気を遣うほどの低姿勢で対応をしてくれた。
「こちらにどうぞ」
案内されたのは小さな部屋だった。入ってすぐ、隣室との壁の上半分が窓になっていることに驚く。まるで刑事ドラマで観る取調室のようだ。窓の下には複数のモニターが並んでい

て、窓の奥――隣室とモニターを一緒に見られるようになっている。
「お疲れ様です。ちょっと見学させてもらいますね」
宗形が言うと、モニターの前に座っていた男性二人はすぐに腰を上げて席を譲った。しかし宗形は丁重に断ると、男性たちの後ろに立って説明を始めた。
「この窓はマジックミラーになっています。あちら側からはこちらが見えません。鏡になっているので、あちらの部屋にいる人はあのような自分のいやらしい姿を見ることになります」
宗形の視線の先、つまり隣の部屋の中央には裸の青年が椅子に座っていた。大きく足を開き、股間にはオナホール。それをゆっくりと黒服に動かされている。
『アッ……ン……ああっ……』
青年のものらしい嬌声が聞こえてくる。どうやらマイクで集音しているらしい。狭い室内に、いやらしい音が響く。
「こちらの部屋は落合さんたちが実際に働く場所ではありません。働くことになればこの窓の奥……あちら、ちょうど椅子に座っている彼の立場になってもらうことになります」
宗形の説明中も、嬌声は止まることなく響き続けた。モニター前に座っている男性のうちの一人が「ペースを落としてください」と設置されたマイクに向かって言う。すると、黒服のオナホールを動かす手が目に見えて遅くなった。
『やぁっ！　やああっ！』
『気持ちいいですか？』
『ああ、ああっ！』
気持ち良さそうだけれど、かなり苦しそうだ。一体何のチェックをしているのだろうか。
「今は何の作業を？」
どうやら宗形も疑問に思ったらしい。タイミングよく確認をしてくれた。
「新作オナホールのチェックです。オナホールの中心に尿道挿入用の素材がついているものなので、尿道部分の太さや硬さのチェック、それに伴って尿道が傷付かないかということもチェックしています」
尿道責めのついたオナホールは以前にも店で取り扱っていたことがある。それなりに人気の商品だったので、きっとバージョンアップした玩具を作っている最中なのだろう。
「……すごい……こんなに見られちゃうんですね」
声につられてそちらを見ると、楓は並んだモニターを見つめていた。
「恥ずかしい……」
モニターには陰部のアップが映し出されていた。オナホールに包まれたペニスを映すのが二台と、陰嚢を撮るようにして下から映しているもの、アナルのアップ、顔のアップ、それから乳首まで。
「こちらの映像は全て記録しています」と、スタッフのうちの一人が説明を加えた。
「何度も見返して、射精の瞬間の様子も合わせて研究所に回すんです」
そんなことまでするのか。でも、ここの玩具が人気な理由が分かったような気がする。
もう一人の男性がマイクに顔を近付けた。

「そろそろ射精しましょう。きちんと精液が出るかも確認しますので、射精するときは必ず言葉で伝えるようにお願いします」
射精の仕方まで指示が飛ぶ。これはかなり恥ずかしいだろう。しかし、仕事だ。
『はいっ、あっ、あっ』
嬉しそうに青年が笑った直後、黒服がオナホールを持つ手を速めた。ちゅこちゅこといやらしい音がマイクを通じてこちらの部屋までよく聞こえる。
「良さそうですね。陰嚢が上がってきました」
わざわざ言う必要があるのだろうか、と思ったけれど、それはどうやら黒服へのメッセージらしい。万が一青年が射精を告げられなくても絶頂のタイミングできちんとオナホールを抜くことができるようにということなのだろう。
『あああっ、すごいっ、あ、あっ、おしっこの穴擦れるっ！　さきっぽ、もっ！　あんっ！　しゅごいっ！』
いやらしい声。そして音。荒い息の音さえも拾っている。
『ああ、ああ、ああっ』
「イくな」
「ええ、イきますね」
モニターを監視している二人は青年のイくタイミングを把握しているらしい。何やら機械を操作すると、モニターに映るペニスが更にアップになった。
『ああ！　イきます！　イきますううううあああ！』
思わずモニターを観てしまった。陰嚢がきゅっとせり上がる様子を映しているモニター。上部に少しだけ映っていたオナホールが消え、隣のモニターにはようやく姿を現したペニスが映っていた。

〜〜〜〜

「おちんちん、痒い……」
急いでペニスに視線を向ける。ちらりと視界に入った窓の奥で、二人もモニターに視線を移したのが見えた。
「どこですか」
「お、お汁……」
いやらしい言い方だった。けれどこれは、楓の言い方だった。精液もカウパーも腸液も、全て「お汁」。きっとそういう言い方をするように躾けられてきたのだと思う。本当は他の男に教えられた言葉なんて使わないでほしかったけれど、どうしても「お汁」という言い方がいやらしくて可愛くて、やめさせることができなかった。
「ああ、痒いんですね」
家ならすぐに清めてやれるが、撮影もされている今勝手に手を出すことはできない。窓の方に顔を向けると、稲本が親指を上げていた。隣では大久保がマイクに顔を近付けている。

『安藤くん、おちんちん拭いてあげて。でも刺激はしないように優しく』
「はい」
そのまま教えられた通り、洗面台の下の扉を開いてみる。そこから柔らかいコットンを取り出し、それで丁寧に拭っていく。
「あっ、ぁあ……」
きっと苦しいだろう。そっと拭くと痒みが増す。けれど拭き終えれば少しはマシになるはずだ。
「ああ……ん、やぁん……」
悩ましげな声が腰に響いた。しかし今はどうしてやることもできず、拭き残しのないよう陰嚢まで丁寧に覗き込み、それからモニター室を見る。
『綺麗になったよ』
もうこれ以上弄ってやることはできず、コットンをゴミ箱に捨てて楓の横に戻った。顔を覗き込むと、少し苦しそうではあったけれど、痒みに身体を痙攣させることはなくなっていた。
それから十五分。楓は何の刺激もないというのにペニスを勃起させ続けた。そして――。
「射精、したいです……」
その声はモニター室にも聞こえたはずだ。視線をやると、大久保と稲本が相談するように話していた。
「お汁出したいよお……」
小さな泣き言。でも、楓は焦らされるのも好きなのだ。
『じゃあ、見てるから。もう一度えっちな想像だけで射精してみようか』
「や、むり、無理ですっ！」
さすがに見られ慣れてきたのだろう。視姦だけでは射精に至れないと涙を零す。
『じゃあ安藤くん、ペニスをそっと撫でてみて』
「はい」
言われた通り、握ることも抓むこともせず、伸ばした指でそっと敏感な裏筋を撫でてみる。
「ああっ！」
拘束された手足が一気に動いた。しっかりと固定してあるので暴れても落ちることはない。だからただ、楓が苦しそうに動けば動くほど興奮する。もっと焦らしたくて、苦しめたくて、指の先で触れるか触れないかという距離で撫でる。
「あああああっ！」
(すごい……)
楓が人前で裸体を曝している。急所を大きく曝しながら、手足を拘束されて勃起している。
「ああ、ああっ！」
敏感な身体はそのまま撫で続けるだけで、呆気ないほど簡単に吐精した。
「あ……ああ……」
しかし、やはり指示はないので脈打つペニスを握ってやることも、尿道に残った残滓を搾

り出してやることもできない。
「あ……あ……お汁……お汁……」

約７万字、いつも通りのハピエンです！
よろしくお願いいたします～！

大人玩具検品部門―サンプル―
gooneone（ぐーわんわん）
2020/ 9/ 28
メール:gooneonegooneone@gmail.com
pixiv：19591291
Twitter:@gooneone11
ちるちる:gooneone